

作業療法教育における模擬患者参加型の OSCE の試み

井上 千鹿子 Performance Collection

鈴木 孝治 茨城県立医療大学

齋藤 さわ子

村木 敏明

土澤 健一

【目的】

作業療法教育において外部の模擬患者が参加する OSCE の面接場面の課題は例が少ない。今回、作業療法面接場面の課題用シナリオの開発と SP の養成方法について検討した。

【方法】

I 大学の総合実習前後に行われる OSCE で、面接のマナーと共に、情報収集、介入等の能力を総合的に評価する 3 種類の作業療法面接シナリオを作業療法学科教員とともに考案し、これを演じる SP の養成を行った。

総合実習前 OSCE では「脳性麻痺児の座位保持装置への移乗介助と摂食指導ー母親への指導ー」、「不安を訴える患者に対する面接」、総合実習後 OSCE では「脳卒中の後遺症のある女性の評価」を面接課題とし、SP の練習時間は、それぞれのシナリオにつき 4～5 時間とした。複数の SP が同様に演じることができるよう、視点の位置、動作の範囲、発話スピード、などを選定し、疾患の評価に深く関わる所見の統一を行った。

【結果】

考案したシナリオに併せてそれぞれの SP が、1.患者の母親、2.不安を訴える患者(うつ病)、3.脳卒中の後遺症のある患者(左半身麻痺)、を OSCE 中に正確に演じることができた。

【結論】

作業療法 OSCE における SP 参加型の面接シナリオの開発、および SP の養成により、実習前後のコミュニケーション能力を評価することが可能となった。また実習前後のレベルに合わせて、難易度を調整することも可能となった。SP からの評価・フィードバック効果については今後さらに検討したい。